



江名諏訪神社本殿

一棟

指定 平成二十六年五月一日

所在地 いわき市江名字走出

所有者 諏訪神社

延享二年(一七四五)

桁行 一・五九m、梁間 一・四一m

建坪 二・二五㎡

この建物は、一間社流造り、一手先出組軒支輪、本繁垂木二軒、銅板葺屋根で、櫻材が多用されている。板羽目と脇障子、欄間、妻飾りに彫刻が充填され、頭貫に地紋彫、手扶、木鼻(頭貫先)、肘木先木鼻廻縁三方にあり、一手先出組の腰組に刎高欄が付く。胴羽目彫刻や脇障子彫刻には家紋が彫り込まれている。これはそれぞれ寄進者の家紋と考えられる。

また、これらには彩色や金箔の痕跡も見られる。彫刻の制作年代は不明であるが、彫刻に家紋を入れるのは八剱神社本殿寛政十年(一七九八)に見られ、住吉神社本殿(県指定)にある胴羽目彫刻(元文五年(一七四〇))の後藤流初代茂右衛門正綱のデザインに近いものがあることから、創建時に近い江戸中期の作と思われる。

飯野八幡宮や大國魂神社のように屋根の形状が大きく変更されず、流造りではあるが出組を取り入れた変更がなされた。これは、部材の風化具合の差や部材の樹種の違い、それから胴羽目彫刻とその胴羽目板のわずかな金箔痕が改修工事によるものと考えられるからである。

この建物は、建立年代の古い出組形態を示す神社本殿として貴重である。



木造宝篋印塔

二基

指定 平成二十七年五月一日

所在地 いわき市鹿島町久保字西ノ作

所有者 金光寺

(鎌倉時代(十四世紀))

追善塔 高さ 九一・三 cm 基壇巾 二八・〇 cm

逆修塔 高さ 九六・一 cm 基壇巾 二八・〇 cm

木造の宝篋印塔は殆ど残存していない。塔の歴史はインドにおける墳墓、ストーパに始まり、我が国では釈迦の舍利を安置する目的で伽藍の中心にあつたものが、徐々に象徴的存在として小型の石造塔が造られるようになる。小型の石造塔は供養塔、墓塔、納経塔として境内の一隅などに建てられた。

本塔は相輪の受花を仏像の蓮台風に仕上げている点、宝輪をひとつずつ彫り込んでいる点、隅飾を板状に仕上げている点など、石造塔にない形状が見られることから、それ以前の古い造立であると判断し得る。塔の最下部正面基礎部分に文保(三二七)一三二九の文字が読めることから、この時代の作品と思われる。

一基の由来や沿革は解っていないが、「逆修善根塔」と「厄」という文字が彫られていることから、一対で制作されたものと考えるのが妥当である。片方を追善、もう片方を逆修とし、夫が亡くなり追善供養時に妻が自身の逆修供養を行ったと考えるのが一般的である。

塔身に胎蔵界四仏の種子梵字を葉研彫り(彫り込んだ断面がV字型)となっている。種子には漆が塗られた痕跡があり、造立当時は箔押しが施されていた可能性がある。塔身上部から平方の奉納孔が穿たれており、内部で広がっている。逆修塔内部には灰と練香屑が残っている。笠部分は軒下三段、上五段で、その上に凹形の低い伏鉢があり、相輪はホゾにより伏鉢上に立てる構造となっている。宝輪が六輪と不規則であるが、古い塔ほど数が定まっていないものが多く、球体に近い最上部の宝珠の形状などからも、造立時期の古さが読み取れる。



吉田家門 一棟

指定 平成二十八年五月二日

所在地 いわき市泉町三丁目

所有者 個人

江戸時代後期

桁行 二・六六m、梁間 一・八一m

建坪 四・八五㎡

吉田家門は両袖潜戸付門で、泉館の門の遺構である。屋根形状は切妻造、本瓦葺き。泉館での建造時期は不明だが、建物の風化度合いから江戸後期と考えられる。明治維新の折、藩のために尽力した功により現在の場所に移築したと伝えられている。

移築時の改変がどの程度なのかは資料が少なく確認できないが、本体構造が統一されていないことや多数の改変痕跡などから、構造体の変更があったことは間違いない。

鬼瓦は本多家の「本」の文字が入った影盛型鬼瓦である。これは蔵造り商家などに見られる形状である。吉田家所蔵の写真によるとセメントモルタルによる影盛は大正初期頃に付加されたものであることが分かっている。

親柱が野地化粧天井板まで伸びた非常に珍しい構造である。これは創建時の構造ではなく構造改変があったと考えられる大きな要因となっている。本来、城館の表門としての格式であれば四脚門(平城下の長橋口木戸門でも三間一戸の四脚門である)とすべきであるが、この門の親柱の形状はその様式に合致しない。

親柱から外に別木で繋がれた冠木上面には一〇・五cm角の縦格子痕の上に七・六cm角の菱格子の痕が残されている。これらは他の部材と比べて風化が激しく明治の部材とは考えにくいため、泉館で複数回実施された改修痕といえる。建造当初は簡素な門であったが藩の面目を保つために幾度かの改修を重ね、今日のような四脚門に似せた形状になったと考えられる。



絹本着色眞言八祖像

八幅

指定 昭和五十一年五月二十七日

所在地 いわき市四倉町薬王寺字端

所有者 薬王寺

室町時代(十六世紀)

総縦 一六二・五cm、総横 五五・八cm

本地縦 八三cm、本地横 三九・五cm

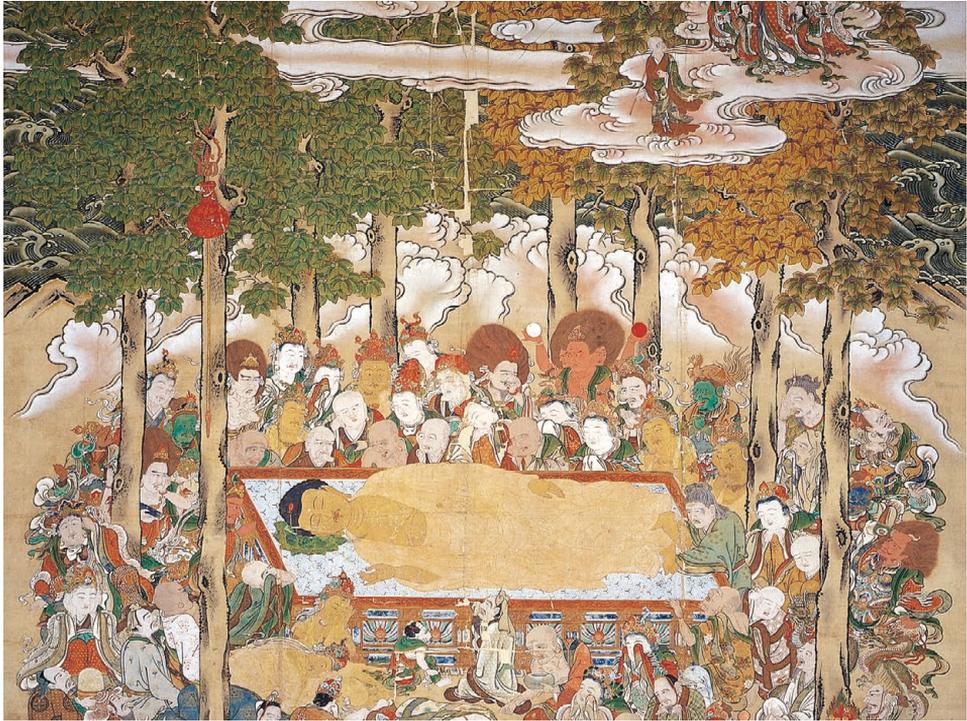
眞言八祖像とは、眞言宗を伝えた、りゅうぼう竜猛菩薩・りゅうちさん竜智三蔵・こんろう金剛智三蔵・ふくろう不空三蔵・ぜんむい善無畏三蔵・いちぎょう一行阿闍梨・けいか惠果阿闍梨・くうかい空海(弘法大師)の肖像画である。その祖本は空海が唐において惠果阿闍梨から眞言宗を学び、帰朝する時に六幅が請来され、のち惠果と空海が加えられ八祖像となった。眞言宗の大寺院において、儀式の時などに八祖像が掛けられ、宗祖を尊ぶ信仰上から多くの模本が作られた。

薬王寺の眞言八祖像は絹本着色の画像で、肥瘦のない鉄線で描かれ、線にのびやかさがあり、彩色に豊かさを欠くが、各幅ともに宗祖の面貌を良く伝えている。上部には色紙形があつて空海像の色紙形には蘭・松・牡丹が描かれているが、外の幅には何も描かれていない。

表装にはぎす緞子、中周りには菊花文のきんらん金欄を用い、軸はれんげもん蓮華文魚子地の金具を付している。

本図の伝来については定かではないが、各幅の巻留に「享和元年(二八〇)辛酉初秋七月修捕焉延寿山什物隆鏤」の修理墨書がある。

作風からみて室町時代作の模本と思われる、いわき市内において当時の絵画は数も少なく、八幅完備していることは貴重である。



絹本着色涅槃図

一幅

(附) 画涅槃讀并序

一幅

指定 昭和五十一年五月二十七日

所在地 いわき市四倉町薬王寺字塙

所有者 薬王寺

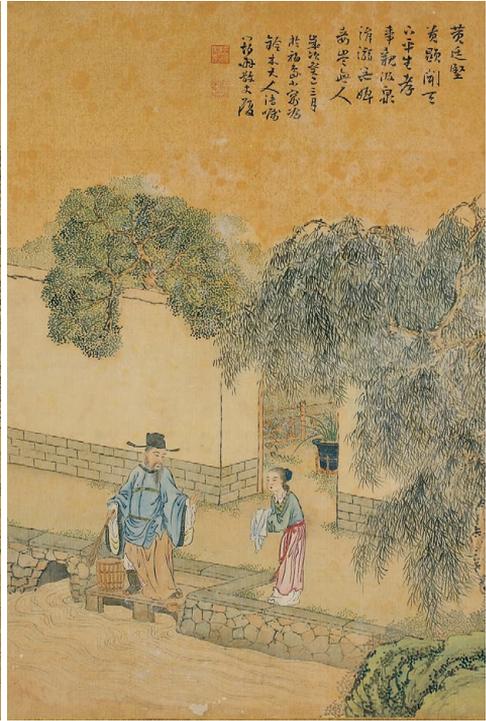
江戸時代・元禄十五年(一七〇二)

総縦 三二〇cm、総横 二四七cm  
本地縦 二五九cm 本地横 二二三・五cm

涅槃図は釈迦の人滅に際し、門下の大衆をはじめとし、諸天・鬼神・禽獸・虫魚等五二類の衆生が集まって悲歎に暮れている様子を描いたものである。釈迦は四枯四榮の沙羅樹の下の床上に、北首右脇下にして西面して臥している。四周には阿難以下の仏弟子及び五二類の衆生が集合し、右上方には釈迦の生後七日にして死別した生母摩耶夫人が天上より雲に乗じて来臨し、愛子悉達多(釈迦)の入滅を悲嘆している。当時釈迦の指名を帯び、遠地伝道に赴いていた迦葉は、釈迦の入滅を聞き急きよ帰来し、その席に坐した情景を描いている。

本図には、薬王寺二十世日元の記した「画涅槃像幀讀并序」が別幅になって付いている。それによると、元禄十五年(一七〇二)二月十五日、江州坂北郡の生まれの中川右衛門義英が弘願を発し、浄財をもって上京した。そこで京の絵師・法橋栄賢に依頼して作製し、父母の冥福を祈って薬王寺に寄進したものである。薬王寺ではこれ以来、毎年二月二十五日の涅槃会には本図を掛けて儀式を行ったのである。

画風からみて法橋栄賢は、京の狩野一派の画人と思われる、その大画面を謹直な筆致でまとめあげている。描写も優れており、当時代の超大作である。



絹本着色二十四孝図屏風 大須賀筠軒筆

一 双

指 定 昭和五十一年十一月三日  
所在地 いわき市平字一町目

所有者 個人

明治二十六年(二八九三)

縦 五八・〇cm、横 四四・五cm

大須賀筠軒筆の二十四孝図で、二四面を一扇に二面ずつ貼り、六曲一雙の金屏風仕立てにしたものである。

二十四孝とは、中国の故事に基づいたもので、親の好きな竹の子を、豪雪の竹林から掘り出して食べさせたいという猛宗など、二四名の親孝行物語である。

各図は青緑山水手法の南宗画で、山水や人物等がそれぞれの故事に基づいて描かれ、天には霰箔をまき、上部に漢詩の自讃がある。筆致は謹厳で細密な描写がなされており、彩色もよく、筆力・気力の充実した作品である。

黄庭堅の図には「貴顕聞天下。平生孝事親。汲泉涓滴若。婢妾豈無人。」の讃があり、つぎに「歲次癸巳三月。於福島小寓。為鈴木大人清嘯。筠軒散史。履朱文印(白文印)」の落款がある。明治二十六年(二八九三)三月、福島市の鈴木氏の依頼によって描かれたもので、時に筠軒五十三歳であった。

大須賀筠軒は磐城平藩の儒者神林復所の子として天保十二年(二八四二)に生まれ、名を履、字を子泰といい、大須賀家に入ってから次郎左衛門と称し、後に次郎と改めた。江戸に遊学し、林大学頭の家塾に入り、また安積良斉にも学んだ。第一回県会書記を経て、明治十二年(一八七九)行方字多郡長、二十七年(二八九四)福島県尋常中学校(安積高等学校の前身)教員、二十九年(二八九六)仙台の第二高等学校教授となり、大正元年(一九一二)七十二歳で没した。詩・書・画を良くし、歴史にも造詣が深く、著書に『磐城史料』『美術漫評』『緑筠軒詩抄』などがある。



みなとのたもと  
源為朝の図額ずび

一面

指定 昭和五十二年五月四日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

江戸時代・安永六年(一七七七)

高さ 八四cm、横幅 七一cm

上部が屋根形の板額で、杉板を三枚合わせたものである。これに極彩色をもって、波打ち際に立つ為朝と、その弓の弦を張った二匹の鬼が描かれている。その銘に「奉掛御広前 所願成就処勝川春清画 干時安永六丁酉歳十二月吉辰 願主薄磯浜正井善平」と記され、安永六年(一七七七)十二月、薄磯浜(平薄磯)の正井善平の依頼により、勝川春清が描いたものであることがわかる。

奈良地方では、子供の疱瘡よけに用いられる絵馬に為朝が登場する。弓を突き出した為朝と、その弓の弦を引張張っている鬼の、いわゆる力競いの図である。為朝のような豪勇な人は、百鬼をも打ち払ってくれるという意味と思われる。

絵師勝川春清は、浮世絵の一派勝川派を開いた勝川春章の門弟で、作品の少ない絵師である。本絵馬は、師春章の画法を良くとらえ、誇張された表現は顔の隈と力を強く描いており、四肢の表現などに芝居画としての勝川派の特色をあらわしている。浮世絵の絵馬として、当地方では珍しい存在である。



鬼と力士の首綱引きの図額

一面

指 定 昭和五十二年五月四日

所在地 いわき市小名浜住吉字住吉

所有者 住吉神社

江戸時代・寛永二十年(二六四三)

高さ 八三cm、横幅 一一五cm

上部を唐破風の型にした板額で、板面の下地に金箔を押し、彩色をもって鬼と力士の首綱引きを描いたものである。現在は彩色・金箔ともに剥落し、素描の線を残すのみだが、これがかえって鬼と力士の力強さをあらわしている。絵師は不明であるが、狩野派の絵師によって描かれたものである。

この絵馬の奉納者は、鍍金された縁金具に「下り藤」の紋所があるところから、磐城平藩主又はその一族の内藤氏であることがわかる。また、「御神前 武運長久所 寛永式拾曆未癸九月 施主 敬白」の銘文から、飯野八幡宮の「引馬図」と同年の寛永二十年(二六四三)に奉納されたものである。

住吉神社本殿は、寛永十八年(二六四二)に再建されており、この絵馬はその二年後に奉納されたもので、武神として名高い住吉・飯野八幡宮両社に奉納された意義は大きい。しかもこの絵馬は、力への憧れを意味するもので、武運長久の祈願にふさわしいものである。



紙本着色十二天図

一一幅

指定 昭和五十四年四月一四日

所在地 いわき市四倉町長友字大宮作

所有者 長隆寺

室町時代(一五世紀)

総長 一五一cm、総幅 三三・五cm

本地縦 七六cm、横 三三・五cm

十二天は方位を守護する神として、古くからインドで信仰されていたが、後には仏教に取り入れられた。四方・四維の八天と、上・下の二天、それに日・月の二天を加えたものである。その方位と尊名は、東方・帝釈天、東南方・火天、南方・焰摩天、西南方・羅刹天、西方・水天、西北方・風天、北方・多聞天、東北方・伊舍那天、上方・梵天、下方・地天の十天に、日天、月天を加えた十二天である。

日本では、空海によつて密教が伝わった当時は十天像が使用されたと考えられるが、空海以後、請来された儀軌によつて、日天、月天が加えられ、十二天像が作られるようになった。

密教寺院における儀式では十二天の幅をかけたり、屏風を飾つたり、また十二天供では壇の中央に四臂の不動尊を安置し、その周囲に十二天を配して修法を行った。こうした修法を行ったのは、市内では薬王寺(四倉町薬王寺)や大高寺(勿来町大高)などであった。

この十二天図は近年の改装による緞子表具で、中周りは金欄の掛幅である。室町時代の仏絵師の作とみられ、各尊の輪郭や衣の線は中細の伸びやかな鉄線で、顔や手足の指などは細い線で表現しており、諸尊の顔貌・姿勢はそれぞれ良く描かれている。当初は華麗な彩色であったが、地蔵堂に長年掛けていたので、彩色に変色や剥落があつて保存状態は良くないが、一二幅揃っていることは貴重である。薬王寺の所蔵であったが、明治年間渡辺家が当寺に寄進した。



石古曾切通

杏所陸前浜街道紀行巻

一巻

指 定 昭和六十年三月二十九日

所在地 いわき市植田町中央一丁目

所有者 個人

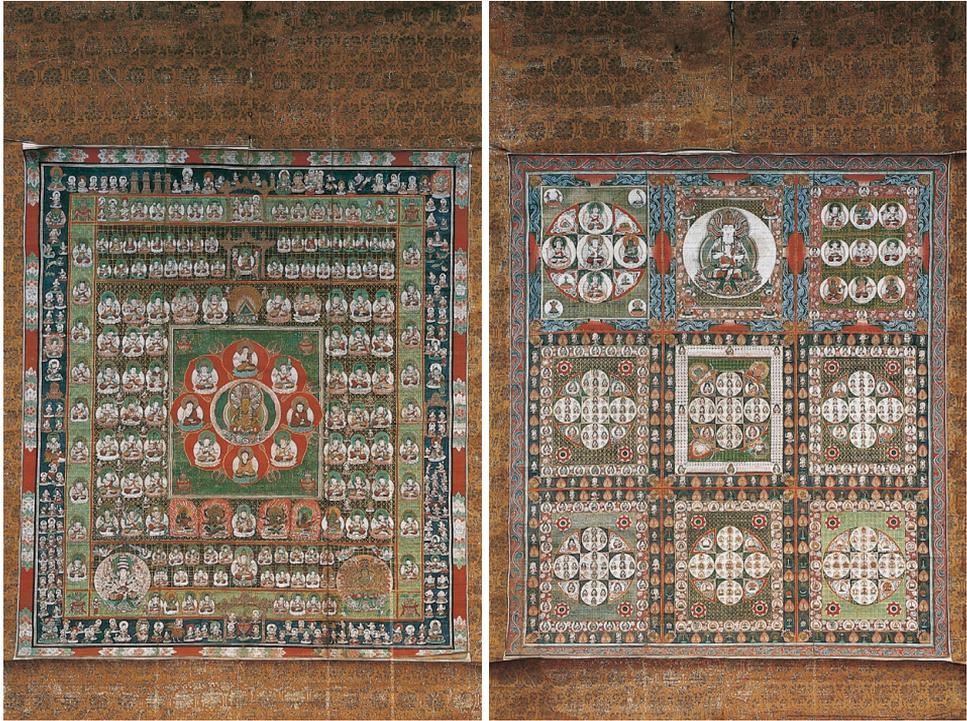
江戸時代末期

この紀行巻は、立原杏所が松島に旅行したとき、今の浜通りの各所を描いて一五枚の絵で構成したものと伝えられている。現在は卷子本になっているが、以前は画帖仕立てであった。制作年代は記されていないが、杏所は文化七年(一八一〇)に松島方面に旅行しているので、そのときの作品と推定される。画題の内容は次の通りである。磯原・二つ島・平潟・名古屋切通・九面・サメ川・岩城平・細谷村・末続ノ浜・海老沢村・松河潟・原釜・名取川・大谷村・松島五大堂の一五景で、そのうちいわき市内の風景は六景ある。

「岩城平」は尼子橋を南西から見た長橋町付近の景観で、左上に尼子稻荷神社が描かれ、「細谷村」は仁井田川が新舞子海岸で海に流れ入る河口の情景を描写し、勿来の関は切通しになっている。当時の地勢を考察する上で参考になる貴重な歴史的资料にもなっている。随所に遠近法を用いた表現もあり、新しい描法を積極的に取り入れた筆者の意図と、画壇の社会的傾向をよく表している。

杏所は、天明五年(一七八五)水戸に生まれ、字を子遠、号を東軒・玉琿舎・香案小吏と称し、谷文晁の影響を受けて幅広く諸派と交流し、折衷様式の独特の画風を確立した。

図巻に付された「陸前浜街道」の題目は、これが所有者に所蔵された後に付けられた名称である。この名称は国道六号線の古い総称であり、厳密には明治五年太政官三十四号により千住・水戸・岩沼間に規定された。江戸時代には水戸・岩沼間は岩城相馬街道と称した。



絹本着色二両界曼荼羅

二幅

指定 昭和六十二年三月三十一日

所在地 いわき市小名浜住吉字搦町

所有者 遍照院

室町時代(十五世紀)

縦 一三五cm、横 一一七cm

縦 一三六cm、横 一一七cm

両界曼荼羅は、胎藏界と金剛界の二面からなる。大日如来を中心としながら、諸尊を異なった体系に構成している。密教の宇宙を象徴したものととして尊重され、灌頂などの重要な儀礼や修法のときに用いられる。最も一般的なのは、空海が請来したいわゆる現図曼荼羅の系統で、遍照院所蔵のものもこれに属する。

両図とも、幅約四五cmの絵絹の左右に、幅約三六cmずつの別の絵絹を継いだ幅の広い画面である。

概ね諸尊は、墨描の上に金泥や白などの肉身色が塗られ、朱で細かく描き起こされているが、胎藏界持明院の忿怒形象は淡い墨と群青のほかしてふくよかな肉身が表現されている。尊像の装身具や法具類は金泥であらわされているものの、頭光の周囲や他の文様、界線など、截金を用いたところも少なくない。現在では、全般にかなり厚手に補彩が施されており、両幅ともに軸銘がある。天正十二年(一五八四)と延享四年(一七四七)に修理を行なったときの墨書銘である。この時に加えられたと思われる大がかりな補彩によって、制作当初の趣をやや損ねているのが惜まれる。

そのなかでも最初に描かれた墨線は的確であり、また金剛界一院会の大日如来や前掲の忿怒形象などは、比較的良好に当初の尊容を残していて、柔らかな味のある表現が古様を伝えている。



紙本著色黒石大明神縁起絵巻

一巻

指 定 平成二年三月二十七日

所在地 いわき市小名浜愛宕町

所有者 泉町神楽区

江戸時代・宝永七年(一七一〇)

縦 二七・三cm、横 一、七九五・五cm

黒石大明神縁起絵巻は、下川出身の面打師・出目洞白(旧名、水野谷加兵衛)が願主となり、宝永七年(一七一〇)十二月、下川村源養院に寄進されたものである。

見返しには楮の表紙、本紙には鳥の子紙を用いた卷子本で、題字が一四段の詞書と、一三段の絵とあとがきからなる。

「奥州岩城菊田郡下川村黒石大明神並伽藍建立之来由」に始まる詞書のあらましは、次のようなものである。

出雲の国で退治された八岐大蛇の霊が当国に天下り、山中に住んでいた。そのころ、唐から帰った空海が諸国巡歴の途中、菊田郡植田村に来た。下川村境の大きな沼地に住む老蛙が、通りかかった空海に、池の魚や蛙が大蛇に呑み殺されると訴えた。それを聞いた空海は、大蛇に悪行を論し、大蛇は悔い改めた。空海の法力によって大蛇は石に封じ込められ、黒石大明神となった。近くに住んでいた朝日長者は、空海の勧進に応じ、仏教に帰依して海源法師となり、空海を開山として、光明山東光寺源養院を創建した。以後海源法師は源養院において浄業を怠らなかつた。

題字の「黒石大明神」と詞書は、磐城平藩主内藤家に仕えた能書家・佐々木文山(一六五九―一七三五)が、絵は長府藩の御用絵師であった狩野洞学が筆をとり制作された。現在いわき市において知られる唯一の縁起絵巻である。制作に携わった者は、それぞれ当時の著名な絵師と書家であり、いわきにゆかりのある一巻として貴重なものである。



絵馬 渡辺綱の図 一面

指定 平成十一年四月三十日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

江戸時代・正保四年(一六四七)

高さ 一四八cm、横幅 二二四・二cm

この絵馬は、庶民が奉納する小絵馬とは異なり、武運長久を願って神社仏閣に奉獻する大絵馬の典型的作品であり、いわきの絵馬の中で最大の大きさを誇る本格的な甲冑武者絵馬である。

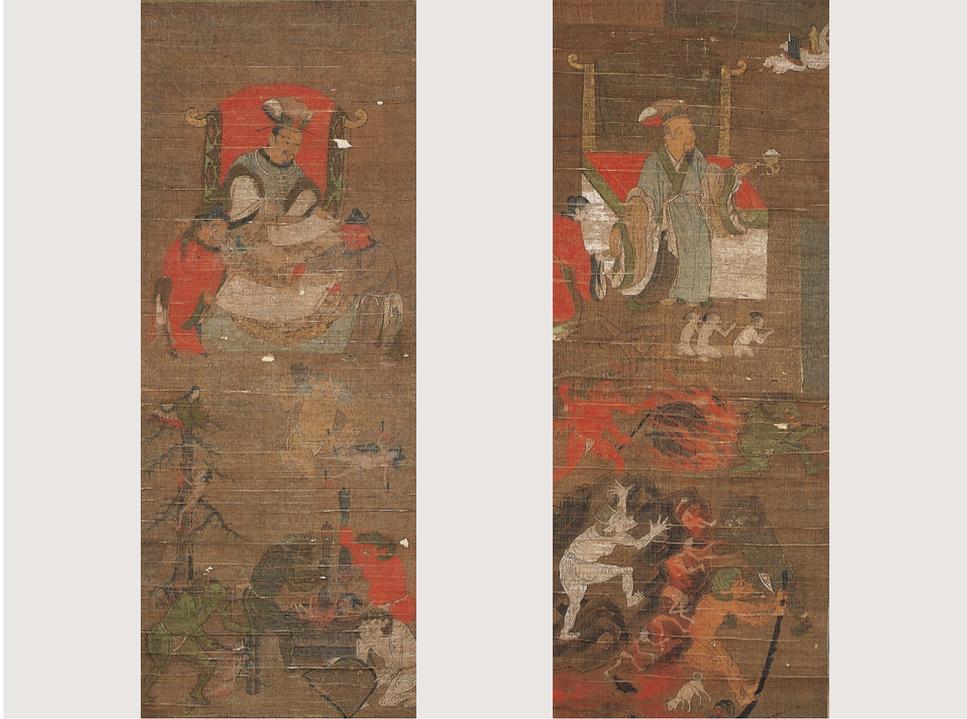
三枚矧ぎの檜板に金箔を施し、平安時代の武将渡辺綱が、羅城門の鬼を退治するという武勇譚に則り、馬上の渡辺綱に襲いかかる鬼の姿が描かれている。

地の金色はよく残っているものの、人馬・鬼の彩色は剥落が激しく、わずかに武者の甲冑及び鬘など、馬具の一部に彩色が残るだけだが、狩野派特有の図柄に基づく渡辺綱のダイナミックな画面構成は、剥落した画面を通して十分に伝わる。

裏面には、剥落してほとんど色彩が失われているが、四隅を岩で囲まれた金地に、様式化された牡丹唐草文様が描かれている。

また、絵馬の縁回りには、渡金された飾り金具が施され、内藤家の家紋である下がり藤が毛彫りされている。

表面の墨書により、この絵馬は、正保四年(一六四七)九月、磐城平藩主・内藤忠興の子義概(風虎)の寄進によるものであり、作者は狩野信之(一六一九〜九二)であることがわかる。願主・筆者・奉納された年代が、明らかに読み取れるこの墨書の存在もまた貴重なものである。



十王図 九幅

指定 平成十三年四月二十七日

所在地 いわき市平山崎字矢ノ目

所有者 如来寺

江戸時代初期カ

縦 一一九・六cm、横 四四・六cm

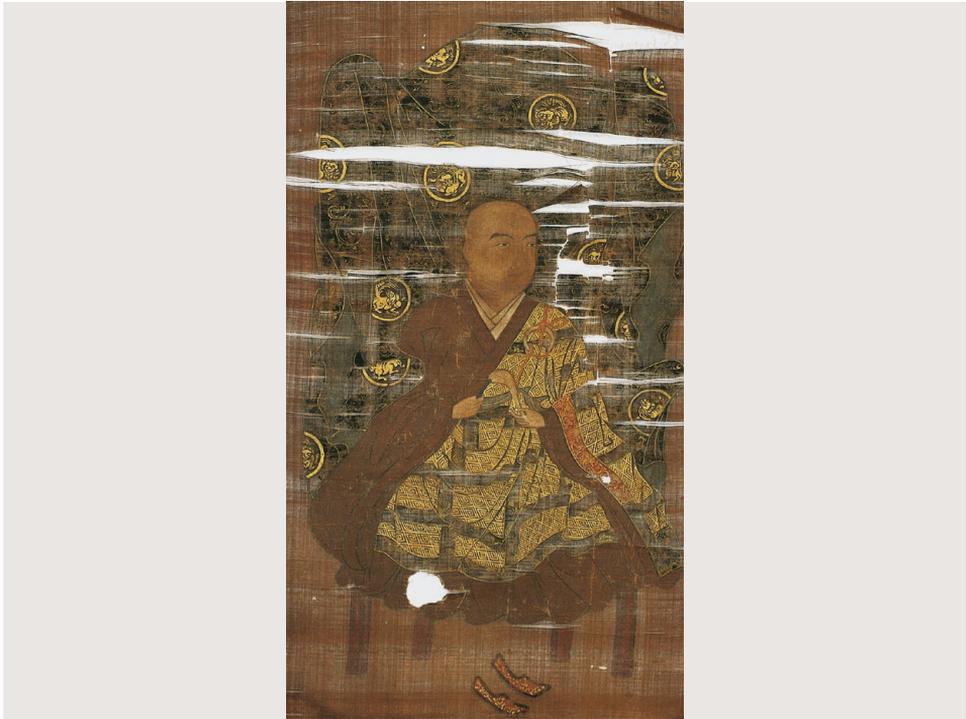
道服を着た十王と、罪を問われる亡者達を描いた本来一〇幅仕立ての十王図であるが、現状は九幅のみ遺されている。

各画幅に、齋日と十王の名を記した位牌形の名札が記載されており、また画面上に本地仏や賛も記されていない。各幅裏面には、如来寺四十六世鈴木知周により、明治四十三年(一九一〇)に赤井村の鈴木峯次郎が表装したことを墨書で記している。

また、『如来寺史』によると天和元年(一六八二)に、内藤義概の命により、家老である松賀族之助をはじめとする家臣たちが、損傷した十王図を修復、寄進したことが知られる。それによると各幅ごとに家臣の名と年号が記されていたが、明治四十三年の修復時に、それらの銘記はすべて取り去られ残されていない。

各画幅のなかには三途の川を描いた場面(初江王)、善悪の秤を描いた場面(五官王)、業鏡を描いた場面(閻魔王)などが描かれる典型的な「地藏十王経」に基づく十王図であるが、各異界の王や眷属、さらに亡者の表現において、中国請来の陸信忠、金大受系列の十王図及び朝鮮渡来の十王図とは考えられず、国内においてさまざまな十王図を組み合わせ、解釈された十王図のひとつと考えられる。

制作時期については不明であるが、天和元年における修復が行われたことを考えると、江戸時代初期あるいは江戸時代以前の作とも推測される。特に、鉄臼の中で亡者が獄卒に突き殺される表現がみられる画幅(五道転輪王)が、永禄三年(一五六〇)に刊行された「地獄十王経」にみられる挿図と近似しており、如来寺本の成立時期を示唆する資料のひとつとして注目される。



浄蓮社良清上人画像

一幅

指定 平成十三年四月二十七日

所在地 いわき市平山崎字矢ノ目

所有者 如来寺

江戸時代前期

縦 一二・九・六cm、横 四四・六cm

この良清上人画像は、現在では描かれた絹地(本紙)のみが遺っている。かつては表装されていたと思われるが、その裏地が剥がされたものである。絹地には亀裂が走り、また絹地そのものの劣化が著しい。画面左上に「浄蓮社良清上人」と墨書され、肖像画の人物が如来寺二十二世良清上人であることが記されている。幸いにも後屏付き椅子に法被を掛け、扨子を右手に持つ良清上人を描いた顔料及び金泥がよく残されており、良清上人その人の様子をよく伝えている。また画面と同一の絹地に一文字と中、風帯が描かれており、いわゆる描表具が施されている。この描表具は、県内の他の肖像画にほとんど例がなく、その意味でも貴重である。

『如来寺史』によると二十二世浄蓮社良清上人は、専称寺十五世良静上人の門弟で、大念寺を開山し、その後、相馬領内に移り、南屋形村(相馬郡鹿島町)の阿弥陀寺二〇世となっている。延宝八年(二六八〇)如来寺住職を辞し、元禄十四年(一七〇二)に入寂している。

良清上人は、寛文七年(二六六七)に如来寺の縁起を作成したと寺史にあり、遺影とすれば元禄十四年以降となるが、延宝八年における如来寺住職隠退の時期の寿像とすれば、延宝の頃の作と考えられる。如来寺に遺された数少ない歴代住職の画像であり、絵画及び歴史資料として貴重である。



常勝院着色杉戸絵 二四面

指 定 平成十四年四月三十日

所在地 いわき市平中平窪字岩間

所有者 常勝院

江戸時代後期

縦 一六八・七cm、横 一一九・〇cm(六枚)

縦 一六八・七cm、横 七三・四cm(六枚)

常勝院本堂を囲む一二枚の杉戸の表裏合わせて二四面に、四つの画題に大別された着色画が描かれている。まず、客間を囲む杉戸一四面には、その左右と中央に松の大樹を配し、左から右に流れる流水が大きく湾曲しながら流れていく様子が描かれている。次にその裏側のうち四面には、雌雄二対の唐獅子に牡丹図が描かれ、次の六面には、鶴を背にした人物と童子、酒瓶の側に立つ人物と鶴、さらに書画を描く人物が配されている。童子と鶴と士大夫を配した画は、宗代の著名な詩人である林和靖にまつわる画題と考えられる。最後の二面には、馬に乗る貴人と従者、さらに剣を用いて衣を突き刺そうとする人物という奇異な場面が描かれている。この画題は晋の智伯の臣子讓の故事に基づいた予讓裂衣図と考えられる。各杉戸の表面は擦り傷や汚れなどが見られるが、顔料を用いた着色は良く残っている。なお、落款及び墨書等は確認できず、引き手は一部後補である。

杉戸絵にみられる唐獅子と牡丹を組み合わせた構図は、狩野派特有の画題であり、狩野常信筆による「唐獅子に牡丹」、あるいは狩野山楽筆「唐獅子(飛禽走獸図巻)」を先行例として想起させ、本杉戸絵の作者は、江戸時代後期の狩野派系統画人の作と考えられる。また本堂の改築が明和四年(一七六七)に行われたとする記録が残されており、その際に杉戸絵が描かれた可能性もある。これほどの量、質に富んだ杉戸絵は市内では数少なく、絵画資料として貴重な存在である。



翁おきな 面めん 一面

指定 昭和四十三年十二月二十七日

所在地 いわき市泉町下川字神笑

所有者 津神社

江戸時代・万治二年(一六五九)

高さ 二三・二cm、幅 一四・五cm

厚さ 七cm

翁は能の一つで、天下泰平・国家安穩を祝す祭式的な性質がある。俗界を放れた清浄境を表すために、面の皺の表現、飾り眉、飾り紐などに宗教的な作法が取り入れられ、他の能にさきがけて舞われる。

津神社所蔵の翁面は、下川村横町(泉町下川)出身の能面師水野谷加兵衛が、万治二年(一六五九)九月に鎮守である同社に奉納したものである。

翁面は桐材を用い、切顎きつあごになっていて、顔面部と下顎部に分れ、紐でつないである。額や頬の皺彫りは穏やかで、目はわん曲して目尻が下り、齒の欠けた様など、翁の風貌を良く表現している。唇は朱を塗り、眉・髭には白毛を植えている。能の中で翁は最も神聖視されているが、この面はそれにふさわしい作品である。背面は穏やかな鈍目かぬめを残し、次の刻銘がある。

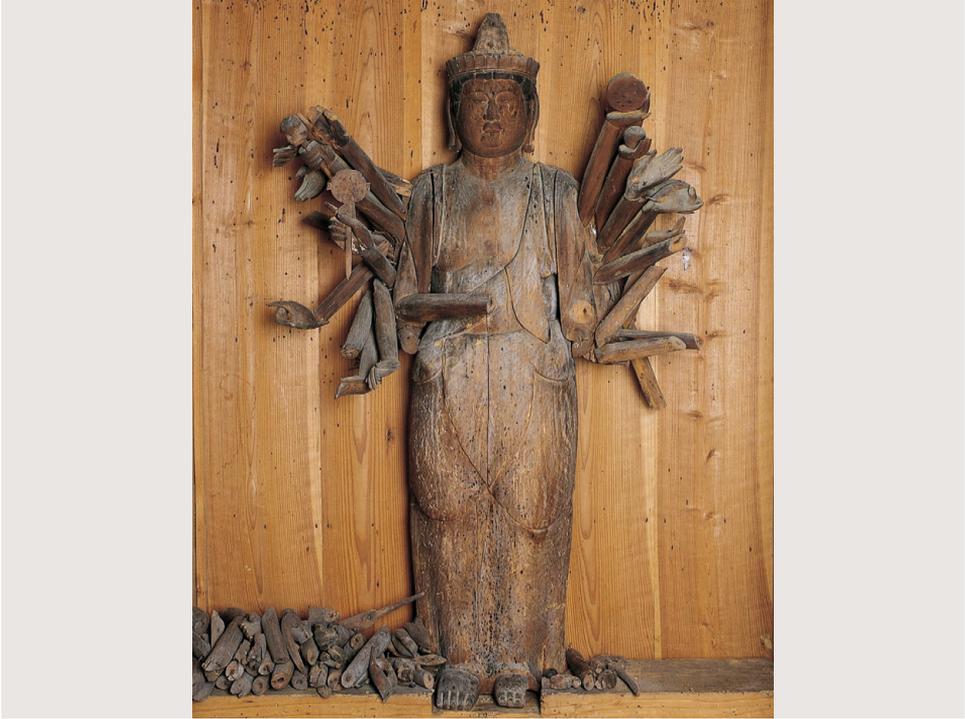
御面岩城住菊田郡 下川村

奉掛御宝前

万治二己 九月吉旦

水野谷加兵衛作

水野谷加兵衛は大野出目家三代助左衛門(幕府御抱え面打師)の養子となり、四代の名称をついだ。洞白満喬の前名で備後掾、後に淡路掾と称した。制作期は貞享・元禄の頃で「天下」てんかと号した。出目家代々の内でも傑出した作者で、泥彩色は無類とされている。正徳五年(一七一五)八十三歳で没した。この翁面は洞白壮年期の優れた作品で、制作年代が明らかな標準作である。



木造千手観音立像

一 軀

指 定 昭和四十三年十二月二十七日

所在地 いわき市平絹谷字諏訪作

所有者 絹谷区

平安・鎌倉時代(十二世紀)

像高 一三七・五cm

本像は、現在諏訪作にある諏訪神社境内の堂に安置されているが、もとは青滝の堤の上にあった青滝寺に安置されていた。同寺は、室町時代には如来寺の末寺で浄土宗であったが、江戸時代初期に羽黒派の修験寺となった。明治に入り、修験寺の廃止・廃寺・火災などが重なり、明治三年一月二十八日現在地に移したという。

千手観音は六観音の一つで、正しくは千手千眼観自在菩薩という。本誓は一切衆生のために地獄の苦悩を救い諸願成就、産生平穩をつかさどるといふ。

本像は概の一本彫りで、背部や腰部に鈍彫りの手法を残し、中刻りは施されていない。ずんぐりとした体軀は堂々とした感じであり、豊かな頬と切れるような眉など顔容は優れている。頭上の化仏は別材で造られ、四体が現存している。全体として虫害を受けており、幾条かの乾割もあって保存状態は良くなく、手や足には後補がみられる。

藤原時代末の様式の名残を示しているが、全体的な像容や脚部・背面を荒削りに残したままの点などを考えると、鎌倉時代初期とすべきであろう。

鈍彫りの仏像は十一世紀末以降、東国に出現した特異な彫刻で、福島県では会津・中通りにあって、従来皆無であった浜通りで本像が明らかにされたことは仏像彫刻の上で意義は大きい。

なお、この観音像は諏訪明神の本地仏である。



銅造阿弥陀如来坐像

一躯

指定 昭和四十三年十二月二十七日

所在地 いわき市鹿島町御代字寺ノ入

所有者 光西寺

江戸時代・明和四年(一七六七)

総高 三・六三 m

蓮座の径 一・九三 m

光西寺本堂の右手に、露座の阿弥陀如来坐像が安置されており、通称「御代の大仏」と呼ばれ親しまれている。

御尊顔は少し面長ではあるが、鼻すじがとおって眼はやさしく、頬にはかすかな微笑みをたたえ慈しみがある。印は定印を結び、衲衣は肩から胸にゆるやかに流れ、背部の衣文とともに大まかな表現でこの巨像にふさわしい。肩はなで肩で女性的な感じがある。仏身の高さは二・八六 m あり、丈六仏と称してよい。形式化した蓮弁には造像の由来、製作者、寄進者の名前が鏤刻されている。

銘文によると、宝暦二年(一七五二)禅法律師の発願によって喜捨がはじめられ、明和二年(一七六五)には江戸日本橋の村田治右衛門、上州伊勢崎の竹内莊兵衛、小名中島の金成六平太等の尽力があり、江戸神田の御鋳物師木村将監藤原安忠によって制作され、明和四年(一七六七)八月に完成した。基壇の石工は、小名中町の長瀬丈右衛門が、天保十二年(一八四二)十一月の修理は、平の儀右衛門が従事した。寄進者は僧俗二千三百余人と多数で、地域的には現在のいわき市内が一番多く、県内では郡山・白河・会津等があり、江戸・上州伊勢崎・水戸・房州・遠江・越中・信州・伊勢白子・美濃などに及んでいる。著名な寺院では江戸高輪の泉岳寺、信州の善光寺が募金に応じている。江戸時代は日本彫刻史の上で、最も衰えた時代であるが、本像は江戸在住の作者によって制作された大作である。



木造興正菩薩坐像

一 軀

指 定 昭和四十七年十月十二日

所在地 いわき市小川町下小川字上ノ台

所有者 長福寺

室町時代(十五世紀)

総高 八四cm

本像は寄木造り、玉眼入り漆塗りの坐像である。頭をやや前に傾け、両袖を左右にひろげ、両手で扨子を持ち、額に深い横じわを刻み、こめかみには血管を張り出す。苦難を乗り越えた温和な釈知にたけた高僧を表わす肖像彫刻である。衣文などの刻出には写実的な表現がみられるが、簡略と形式化があらわれており、室町期の作品とみるべきであろう。

鎌倉の極楽寺には奈良の西大寺(真言律宗総本山)にある興正菩薩坐像の模刻があり、これは釈尊(興正菩薩)の弟子忍性が極楽寺の住持であったことによるものである。

長福寺は真言律宗の寺で、鍋田三善の撰した『長福寺縁起』によると、元亨二年(一三三二)小川入道義綱が檀那となり、鎌倉極楽寺の了俊の弟子慈雲が開山したので、同寺とは深いつながりがある寺である。このような関係から、奥州における真言律宗の中心道場であった長福寺に、極楽寺の興正菩薩坐像の模作が安置されたものと考えられる。

釈尊は真言律宗西大寺中興の祖で、建保五年(一一二七)東大寺で剃髪後、高野山や醍醐寺で密教を学んだ。このころ律学の衰えたのを嘆き、その復興を志して嘉禎元年(一一三五)西大寺にうつり、律宗を興し、戒学を盛んにした。朝野の帰依を得て文永・弘安の役には朝命により敵国調伏の祈禱を行った。また非人らに施行をするなど、社会民衆の救済に当たった。正応三年(一二九〇)西大寺で没し、正安三年(一一三〇)に後伏見天皇より興正菩薩の号を贈られた。